

第二章 先行研究の整理と本研究の位置づけ

2-1 先行研究の整理

2-1-1 婦人雑誌研究

研究対象としての婦人雑誌は、近代女性史の軌跡を辿る資料として貴重であるとともに、ジャーナリズムの歴史を振り返る際に用いられることも多い。

婦人雑誌の盛衰をマクロにまとめたのは、岡の『婦人雑誌ジャーナリズム』¹⁾である。20世紀初頭の雑誌にみられた男尊女卑や良妻賢母踏襲の傾向、戦時中の雑誌の特徴、戦後のテレビの普及の影響と女性週刊誌の台頭、そして近年の婦人総合雑誌の相次ぐ廃刊までを経年的に描き、最後に婦人雑誌ジャーナリズムが男性の支配にあったことを指摘している。

永嶺も同様に近代全般のメディア史を俯瞰しているが、内容を分析するのではなく、階層や性別、教育水準などの要素と照らし合わせたうえで、雑誌がどのような読者に読まれてきたかに焦点をあてている²⁾。なかでも戦前の婦人雑誌に関しては、研究者が分析の対象としがちな読者投稿欄の信憑性について考察している点は興味深い。例えば、投稿者の属性が不明な場合が多いことや、編集者のフィルターがかかって採用されるために偏りがあるかもしれないこと、投書が例外的なものであるから採用されたのか、普遍的であるから採用されたのかが不明であるのに、従来の研究の多くは後者として扱いがちであることなどを指摘している。その上で、戦前に地方自治体や会社、学校等でおこなわれた「読書世論調査」のいくつかのデータを掘り起こし、それらを元に雑誌の読者層の分析を行なっている。

近代のある特定の時代における婦人雑誌を分析することによって、近代女性史を考察したものとしては、以下のようなものがある。

牟田は、女性雑誌に限らず明治期の雑誌における記事内容を分析し、性別役割分業の固定化や「主婦」や「母親」の役割を美化・賛美した記事の多さを指摘して、これを「あからさまな国家のイデオロギー注入」であり、「明治国家の民衆管理」の進捗であると断言している³⁾。

小山は『家庭の生成と女性の国民化』の中で、今世紀初頭に相次いで発刊された婦人雑誌の特徴について言及し、それらが「生活」に強い関心を示すとともに、その改善策に関しての内容が多かったことを、具体的に雑誌の記事を用いながら論述している⁴⁾。

前田愛は『近代読者の成立』⁵⁾の「大正後期通俗小説の展開」の中で、大宅壮一が文芸評論『文壇ギルドの解体期』で述べた「婦人雑誌の進出による徒弟制度によるギルド組織の崩壊」の様子を、雑誌の販売部数や編集者の営業戦略、実際に掲載された小説の中身を調べることで詳細に分析している。前田によれば、

- ・ 大正後期は女子中等教育が充実したこと
- ・ それによって「新中間層」と呼ばれる女性が拡大し、職業を持ち社会進出する女性が

増えたこと

- ・ 彼女らの要求に応じた内容の通俗小説の連載

等が、雑誌売上の向上に寄与したという。

第 2 次世界大戦時の婦人雑誌を分析したものに、『婦人雑誌からみた一九三〇年代』⁶⁾がある。これは教員や社会活動をする複数の女性が『婦人公論』、『主婦の友』、『婦人倶楽部』の 3 誌を分析、それぞれの雑誌の特徴をふまえつつ、戦前から戦後にいたる「戦争」に関する描写を詳細に掘り起こしたものである。

そして近年の雑誌研究の主流は、ジェンダー論からの視座である。マス・コミュニケーション学会では、雑誌のみならず、テレビや新聞などの内容分析を行なって、メディア批判を展開している論考が目立つ⁷⁾。例えば日本と海外の女性雑誌を比較する井上は、日本の女性雑誌が性役割伝達メディアとなっていることや、広告と密接に関連させる商業主義的側面を持っていることを批判している⁸⁾。

特定の婦人雑誌の研究としては、『主婦の友』を分析材料として扱うものが多く見られる⁹⁾。その理由としては、創刊直後から最も販売数が多く¹⁰⁾、「大正・昭和期の近代的な主婦像を展開した」¹¹⁾からだと考えられる。例えば木村は、近代における性別分業体制の成立を『主婦の友』の分析から明らかにするとともに¹²⁾、『婦人公論』と比較しながら、両誌が掲げた「新しい女性像」とその変遷を示している¹³⁾。

家政学の分野では、婦人雑誌は衣食住における歴史考察の資料となる。例えば小林は『主婦の友』の衣生活関係記事の分析によって、大正から昭和初期における衣生活の変遷を¹⁴⁾、久保は『婦人之友』の住生活記事を対象とした分析によって、大正デモクラシー期の中流階級読者の志向した住宅の特徴を明らかにしている¹⁵⁾。

2-1-2 女性組織の研究

表 2-1 縁の諸類型

米山俊直	血縁	地縁	社縁	
デンニース	ゲマインシャフト		ゲゼルシャフト	
マッキーバー	コミュニティ		アソシエーション	
クーリー	第一次集団		第二次集団	
磯村英一	第一空間		第二空間	第三空間
望月照彦	血縁	地縁	値縁	知縁
上野千鶴子	血縁	地縁	社縁	選択縁
	(選べない縁)			(選べる縁)
網野善彦	有縁			無縁

具体的な女性組織の研究として著名なのが、佐藤慶幸らによる生活クラブの組織論的・運動論的研究である。生活クラブにおける、生協労働と雇用労働の 2 面性、組織の階層性・閉鎖性、ジェンダー問題などが解析され、生活者運動の現実とジレンマが明らかにされている¹⁶⁾¹⁷⁾。

吉武は、「血縁」や「地縁」が機能喪失した今日、女性が作り出した新しいネットワーク

を「女縁」と命名した¹⁸⁾。上野は、既存の「縁」の概念を整理したうえで、「血縁」、「地縁」、「社縁」が「選べない縁」であるに対して、新たに「選択縁」を設定した（表 2-1）¹⁹⁾。吉武の言う「女縁」は、ここに含まれる。

天野は、『「つきあい」の戦後史』において、特に戦後発生した主に女性による「小集団（サークル、グループ、ネットワークなど）」の事例を時系列に示し、時代の特徴とともにそれぞれに考察を加えている²⁰⁾。そして、こうした女性による小集団の原型として、講集団をあげている。ここで天野は、「近代化は公と私の分離を伴って進行してきたが、その公と私の二つの領域を行き来することを認められたのはもっぱら男性であり、私の領域に残された女性は、長く公・私の分離やその間の行き来とは無縁な存在であった」という上野の論を引用して²¹⁾、ロバート・J・スミスらの紹介する講中²²⁾が「自分たちで計画をたて、参加・不参加を自主的にきめる自治の機会」²³⁾であったとしている。そして、近年の小集団の傾向は、電子メディアが利用されることによって場所の拘束性がなくなりつつあり、目的志向型から、「目的がないことはすばらしい」とする脱力型に移行しつつあるとして結論付けている²⁴⁾。

このような、情報媒体の発達による組織の広域化や、地域や生活点に根ざした女性を主体とした「生活者運動体」の萌芽に対する着目が、近年の女性組織研究トピックであるといえよう。

2-1-3 雑誌の「共同体的受容」研究

一方、明治から戦後の読書形態に関する研究の中に、書籍の「共同体的受容」に関するものが散見できる。「共同体的受容」とは、（雑誌を含む）本を中心に、人々がバーチャルに、あるいはリアルに共同体を形成して書籍の内容を受容する様相である。先行の研究事例として、前田と永嶺による、明治時代の家庭や地域における本の読み聞かせ（＝音読）の共同体的受容に関する考察²⁵⁾、永嶺による、田舎教師による共同体的読書に関する考察²⁶⁾、永嶺と佐藤による、田舎を離れて都会で孤独感を味わっていた労働者の心の拠り所であった『キング』の読書形態に関する考察²⁷⁾²⁸⁾がある。

戦後のものとしては、阪本による、雑誌『平凡』（図 2-1）の愛読者組織「友の会」の研究がある²⁹⁾。

永嶺が、『キング』の提供する擬似的な共同体の中で、彼等は束の間の安らぎを覚えた³⁰⁾と述べるのとは対比的に、阪本は、1950 年から 1960 年代の勤労青年が主な読者層であった雑誌『平凡』にできた「友の会」は、スターと触れ合ったり、撮影所を見学したりす



図 2-1 『平凡』1953（昭和 28）年 4 月号表紙

る以外に、友だちや仲間を作る機会をも提供してくれる場であって、「単なる『想像の共同体』ではなかった」³¹⁾と述べている。阪本はこれを「若者たちのエネルギーの発現であった」³²⁾と表現している。

婦人雑誌にこのような受容形態はなかったのだろうか。『主婦の友』の「文化事業部」による講演会や講習会、展覧会などの開催は、結果的に「共同体的受容」を促すものであったと考えられる。これに関しては木村も言及している³³⁾。木村は、創刊当初³⁴⁾は創刊者である石川武美と読者個々人との「パーソナル・コミュニケーション」の場であった『主婦の友』が、次第に編集者と読者全体との「マス・コミュニケーション」の場になっていく様子に触れている。そして、「愛読者仲間を、意識の上だけの仮想結社に終わらずに、実際に地理的に近くのもの同士でこうした集団を形成する試みもあったわけである」³⁵⁾として、実際に各地で催しの後に希望者による茶話会や懇談会を行い、それがきっかけで愛読者による婦人会が結成されるようになったことについて述べているが³⁶⁾、『主婦の友』は、たとえば『婦人之友』のように「友の会」を全国的に組織することではなく³⁷⁾、「ほとんどの読者は、誌面を通じての交流のみによって愛読者仲間の存在を意識していた」³⁸⁾として、それ以上の記述はない。

2-2 本研究の位置づけ

2-2-1 先行研究が残した課題

以上、本研究に関連する3つの研究分野の先行研究を概観し、その成果を整理した。これらから指摘できることは、おおよそ次の3点である。

まず第1に、婦人雑誌の研究は、主要雑誌の創刊当初から現代まで多くの蓄積はあるものの、衣食住に関する歴史考察を除き、研究課題の大半が、それぞれの時代における女性の地位や役割、ジェンダー論など、「フェミニズム」の視点にたったものであるということ。

第2に、女性による組織の近年の特徴として、「女縁」が示すように「血縁」や「地縁」によらない新しいネットワークができつつあるということと、天野や佐藤らによって戦後から現代までの各時代における女性組織の傾向や特徴は研究されちるものの、ひとつの組織の数十年に及ぶ長期的な観察研究の事例の蓄積はないこと。

そして第3に、少なくとも1960年代までの雑誌は、田舎教師や都会勤労青年などその居住空間で疎外感を味わっている少数派にとって、こんにちからは想像もできないくらいの心の拠り所であり、読者によって能動的に形成された受容組織には創発的なエネルギーが漲っていた。しかし、婦人雑誌の共同体的受容に関しては、その変遷の様子どころか発足の経緯に関しても研究の蓄積がないということである。

木村の論文の引用のところで触れた『婦人之友』の「友の会」は、全国組織で現在も継続している。「友の会」と共に、もちろん『婦人之友』も発行され続けている。この雑誌と組織の、超長期に渡る軌跡を辿れば、「フェミニズム」とは異なる視点から捉えた婦人雑誌の研究が可能となり、女性組織の長期研究事例として提示することができる。さらに、『婦

人之友』における「友の会」という共同体的受容の変遷を考察することで、組織形成母体としての雑誌の役割について論じることができよう。結果的に「フェミニズム」に関しても、雑誌と組織との関わりという新たな側面から語ることが可能となるといえる。

2-2-2 本研究の現代的意義

『婦人之友』は、全国に情報を発信し読者相互を結びつけたという点においては、インターネットが提供するグローバルで脱地域的な情報システムとの共通性を既に供えていた、先駆的事例であるといえる。その継続力を支えた「戦略」を明らかにすることができれば、今後の、情報を媒体とした広域の参画システムのデザイン設計にも寄与できるのではないだろうか。

【註釈・引用】

- 1) 岡満男：婦人雑誌ジャーナリズム，現代ジャーナリズム協会（1981）
- 2) 永嶺重敏：雑誌と読者の近代 オンデマンド版，日本エディタースクール出版部（2004）
- 3) 牟田和恵：戦略としての家族 近代日本の国民国家形成と女性，51-77，新曜社（1996）
- 4) 小山静子：家庭の生成と女性の国民化，剋草書房（1999）
- 5) 前田愛：近代読者の成立，有精堂（1973）
- 6) 私たちの歴史を綴る会：婦人雑誌からみた一九三〇年代，同時代社（1987）
- 7) 四方由美：「ジェンダーとメディア」研究におけるメッセージ分析，マス・コミュニケーション研究，Vol.64，pp87-102（2004）
- 8) 井上輝子，女性雑誌研究会：女性雑誌を解読する COMPAREPOLITAN—日・米・メキシコ比較研究，垣内出版（1989）
- 9) 大塚明子・石川洋子：戦前期の『主婦の友』における母親の役割と子供観，文京大学女子短期大学部研究紀要，40 巻，pp11-20（1996）石田あゆう：大正期婦人雑誌読者にみる女性読書形態—『主婦の友』にみる読者像—，京都社会学年報，第6号，pp163-180（1998）深谷野亜：母親像の変容に関する史的考察—『主婦の友』誌を事例として—，子ども社会研究，5 巻，pp69-82（1999）大塚明子：戦前期の『主婦の友』にみる「愛」と＜国家社会＞—日本型近代家族における「恋愛」「愛」の固有性とその変容—，人間科学研究，25 巻，pp33-41（2003）佐藤裕紀子：大正期の新中間層における主婦の教育意識と生活行動—雑誌『主婦の友』を手掛かりとして—，日本家政学会誌，Vol.55，No.6，pp479-492（2004）など
- 10) 木村涼子：婦人雑誌の情報空間と女性大衆読者層の成立—近代日本における主婦役割の形成との関連で—，思想，Vol.812，pp232（1992）に、「1917（大正6）年創刊の3年後には早くも雑誌の発行部数第一位を記録し、昭和初期には百数十万部の部数を誇った」とある。
- 11) 木村涼子：前掲書，p233（1992）

- 12) 木村涼子：前掲書，pp232-252（1992）
- 13) 木村涼子：婦人雑誌にみる新しい女性像の登場とその変容-大正デモクラシーから敗戦まで-，教育学研究，第56巻4号，pp11-21（1989）
- 14) 小林操子：大正～昭和初期における衣生活の近代化～婦人雑誌『主婦の友』衣生活関係記事と生活改善運動，戸板女子短期大学研究年報，45，pp13-27（2002）
- 15) 久保加津代：大正デモクラシー期の『婦人之友』誌に見る住生活改善（第一報）『婦人之友』誌の特徴と住生活関連記事の経年的動向，日本家政学会誌，Vol.43，pp59-64（1992）
- 16) 佐藤慶幸他：女性たちの生活者運動—生活クラブを支える人びと—，マルジュ社（1995）
- 17) 佐藤慶幸：女性と協同組合の社会学—生活クラブからのメッセージ—，文眞堂（1996）
- 18) 俵萌子・樋口恵子・吉武輝子：主婦のための女性問題入門 2，教育史料出版会（1982）
- 19) 上野千鶴子：近代家族の成立と終焉，p284，岩波書店（1994）
- 20) 天野正子：「つきあい」の戦後史 サークル・ネットワークの拓く地平，吉川弘文館（2005）
- 21) 天野正子：前掲書，p17，吉川弘文館（2005）
- 22) ロバート・J・スミス，エラ・ルーリィ・ウィスウェル／河村望，斉藤尚文訳：須恵村の女たち 暮らしの民俗誌，お茶の水書房（1987）
- 23) 天野正子：前掲書，p18，吉川弘文館（2005）
- 24) 天野正子：前掲書，pp255-266，吉川弘文館（2005）
- 25) 前田愛：前掲書，pp132-167（1973）や、永嶺重敏：前掲書，pp35-76（2004）
- 26) 永嶺重敏：前掲書，pp77-100（2004）に、明治中期から後期における田舎教師は、文盲率の高い民衆の間であって少数派であり、主に教育雑誌など読むべき雑誌を選定し共同購入するうちに、「知識の共有から問題関心の共有へ、さらには思想の共有へと進む」とある。
- 27) 永嶺重敏：前掲書，pp203-250（2004）
- 28) 佐藤卓己：「キング」の時代，岩波書店（2002）
- 29) 阪本博志：雑誌『平凡』の時代と若者たち，出版ニュース，3月号，pp6-9（2005）
- 30) 永嶺重敏：前掲書，p222（2004）
- 31) 阪本博志：前掲書，p8（2005）
- 32) 阪本博志：前掲書，p9（2005）
- 33) 木村涼子：前掲書，pp231-252（1992）
- 34) 木村涼子：前掲書，p232（1992）に、1917年（大正6年）創刊とある。
- 35) 木村涼子：前掲書，p244（1992）
- 36) 木村涼子：前掲書，p244（1992）
- 37) 木村涼子：前掲書，p244（1992）
- 38) 木村涼子：前掲書，p244（1992）